遺跡からのメッセージ（5）

イギリス滞在記①　大英博物館とイギリスの近代

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao kuwabara*

ロンドンにて

今年の秋学期は、大学の「特別研究員」として、半年の間、研究に専念することを許されて、イギリスに滞在することになった。滞在するのはノーフォーク州のノリッチという都市であるが、最初の1週間はロンドンに宿をとり、博物館を見学することにした。12年ぶりに訪れた初秋のロンドンは、多くの人や車で賑わいながらも、みな整然としていて、気持ちがいい。視界を遮る電柱や電線がなく、過大な広告なども目に付かない。町並みは、場所によって違いはあるものの、赤煉瓦の古い建物と現代的な建築がバランス良く混在し、歴史の積み重なりを感じさせる。

大英博物館のコレクション

他の博物館の追随を許さないと言われる大英博物館は、ロンドン大学などの文教施設が集中するブルームズベリー地区にあり、世界中からの観光客で賑わっている。どの部屋も、かつての大英帝国時代に世界の各地から運ばれた多種多様の貴重な考古資料が所狭しに並んでいて、目がくらみそうになる。ミイラがずらりと並ぶエジプトの部屋は人だかりの山で、展示ケースに近づけないほどだ。

ヒエログリフ解読のきっかけとなった有名なロゼッタ・ストーンは、エジプトの歴代のファラオ像がそびえ立つ大ホールの中央付近にあり、他の彫像類が無造作に並べられているのとは違って、ガラスの展示ケースに収められて特別に扱われている。1799年、ナポレオン・ボナパルトによるエジプト遠征で発見されたこの石碑は、1801年にエジプトでイギリス軍がフランス軍を降伏させた後、協定により、イギリスの所有となって大英博物館で公開され、現在に至っている。しかし、2003年からはエジプトが返還を求め、意見の食い違いが続いたままだ。

古代ギリシア・アテナイのパルテノン神殿を飾った彫刻群も大英博物館の目玉の一つだ。ギリシア神話の神々を見事な造形で表現された数々の彫刻は、ギリシア美術の白眉であり、博物館で丁寧な修復がなされ、展示室の四面の壁を飾っている。アテナイの守護神アテナを祀ったパルテノン神殿は、紀元前447年に修築が始まり、431年に、彫刻類も含めた全体が完成する。この彫刻群は、1800年にイスタンブールに全権大使として赴任したエルギン伯爵が、当時、イギリスと良好な関係にあり、ギリシアもその版図としていたオスマン帝国のスルタン・ゼリム3世の許可を得て、神殿から切り取って本国に持ち帰り、1816年、大英博物館に売却された経緯がある。ドーリア式建築の傑作とされ、世界遺産にも登録されているこの神殿は、1980年代以降、ギリシア政府が修復作業を進めながら、「エルギン・マーブル」とも呼ばれる彫刻類の返還を求める運動を繰り広げ、2004年のアテネ五輪を機とした帰還を働きかけたが、イギリス政府は応じなかった。

もうひとつ圧巻なのは、紀元前9～8世紀、鉄器時代の西アジアを席巻したアッシリア帝国の都市遺跡ニムルドやニネヴェの遺品である。都市の城門を守った遊翼人面獣はその造形の印象が強く、ユダ王国の都市ラキシュ攻防戦（紀元前701年）をリアルに描いたレリーフは、戦勝記念として、首都ニネヴェにあったセンナケリブ2世の王宮を飾っていたものだ。ニムルドやニネヴェの発掘は、1845年～1847年のこと。どちらも、イギリスの考古学者・外交官ヘンリー・レヤードによるもので、その旅行記には、発掘品を遺跡から切り取って運び出す光景が図示されている。レヤードは、1851年にも、ニネヴェの「アッシュール・バニパルの図書館」で2万点を越える楔型文字の粘土板文書を発見し、こちらも大英博物館の収蔵品となっている。

現在、遺跡の現地では内紛が続き、この2月、IS（「イスラム国」）は、イラクのモスルにあるニネヴェ博物館で石像品の数々を破壊し、遺跡に残る有翼人面獣をドリルで粉砕する衝撃的な映像を公開した。4月には、ニムルド遺跡を爆破するショッキングな映像が流れ、シリアでも、ローマ時代の古代遺跡パルミラが暴力的に破壊され、遺跡を守ってきた研究者が殺害されたとの悲劇的なニュースが伝わった。欧米各国が現地からの遺物返還の要求に応じないひとつの理由にしているのは、戦乱などで失われる可能性がある人類共通の財産を守ってきたのであり、返還後に適切に管理されるかが心配だという論理である。現在の状況を見ると、確かに、その論理にも一理があることが理解される。しかし、それで、すっきり腑に落ちるというわけでもなく、割り切れない思いが残る。

博物館とイギリスの近代

ロンドンには、大英博物館の他にも、見るべき多くの博物館や美術館があり、幾つかに足を運んでみた。サウス・ケンジントンにある科学博物館では、1769年にワットが開発した蒸気機関などが展示され、いち早く産業革命を成し遂げたイギリスで、工場制機械工業の導入など、その後の産業・経済・社会にどのような変化が生じたのか理解できる。すぐ近くにあるヴィクトリア＆アルバート博物館では、そのような技術や社会の変化によって、イギリスの各種の工芸がどう変化したかを見ることができる。また、ダーウィンの胸像が正面階段に置かれた自然史博物館では、19世紀後半の進化論を起点として発達した自然史に関わる諸学問の発達、動植物の進化や生態、地球の過去に思いを馳せ、現代の課題を学ぶことができる。

テムズ川を渡った帝国戦争博物館では、近代の負の側面である戦争について、兵器や各種の資料が展示され、とくに第一次世界大戦で、生身の兵士がはじめて近代兵器の威力に晒された惨状が如実に示され、大戦がその後の世界をどう変えたかも説明されている。そう、第一次世界大戦こそが、現在の世界のひとつの基礎を形作ったのだ。今の中東地域で起きている諸々の出来事の遠因は、オスマン帝国が崩壊し、イギリスをはじめとする欧州列強の思惑で定まった戦後体制にあるのではないか。大英博物館に集められた世界各地の古代遺跡の遺物の数々は、古代の歴史や文化ばかりでなく、市民革命、産業革命に端を発した近代化を推進した欧州列強が、帝国主義、植民地主義の時代、博物館のコレクション収集でもしのぎを削り、その荒波に翻弄された中東地域の近代史、そして現代をも同時に映し出している。

大英博物館の正面入り口（筆者撮影）